

不破名護屋遠山鹿子
金瓶梅曾我賜貨
花笠嵯峨猫魔稿

板權所有
興行權

全全全





№18698/22

不破名護屋遠山鹿子

- 男 達 又 六
 - 子 分 雲 八
 - 同 間 助
 - 同 木やの若者芝助
 - 同 喜 六
 - 同 嘉 八
 - 茨木の亭主鬼藏
 - 猪 熊 門 平
 - 田舎侍 金右衛門
 - 阿野四郎元信
 - 名古屋山三元春
 - 名古屋の家來小文次
 - 瀧のさ 二人
-
- けいせい遠山
 - 新造まかき
 - けいしや糸遊
 - 同トくお花
 - 同トくお照
 - 小性駒吉實ハ銀杏の前
 - 仲居お清

本舞臺四間通一上の方遊女屋の外がまへの白木格子板破目此前へ用水桶の上へ手桶をつま
上ないをかけ一間の入口へ柿暖簾へ鬼の面を印一茨木と染出一一面赤ぬりの格子内より
青すだれ都て島原遊女屋のてい爰は稻妻組の男達好みの拵よて雲八間助の兩人ふて茨木の
若い者芝助外は相中の若い者喜六喜八同一拵らへみて猪熊門平仲間の拵らへ男達の兩人は
行ぬい喧嘩の模様新造糸遊内藝者お花おてる皆捨せりふよて留て居る模様をた〜みな
り通りかぐらよて幕明く

(雲間)ヤイ〜留るぢ〜(門)うぬらみこめられてたまるものか(芝)出合頭よ有うちの事
(若者)私〜等が挨拶だ(花)お屋敷の奴さんもふせうでもムンせうが(照)私たちが挨拶ゆへ
(糸遊)挨拶の時の氏神と云升をへ(女三人)もふは了見被成升いナア(門)了管成ぬ所だが女
たちの挨拶だから了簡仕様者だがアノ稻妻組とか云ふ二人が今聞ば身請〜といつて居た
がいつたいどの女郎を身受するのだエ(芝)左様さ間雲さんのお二人が身請とあつ〜やるハ
(雲)この茨木屋の抱へ女郎の(間)遠山太夫を(兩人)身請するのだ(門)ナニ遠山太夫を身受
するこいつハか〜い咄〜だ(間)ヤイ〜身請をするのが何がおか〜い女郎ハ賣物買物だ
ア(雲)たと〜全盛のおいらんでも此島原で人よ知られた稻妻組(間)其こちとらが肩を入
て云込んだ遠山を(雲間)外へやつていつら立ねへ(芝)成程うのおつらが立ねへどおつ〜
やるのハお前様方計りていねへ當時名うての稻妻組又六さんが此間から此茨木屋の親方へ

むりわらじやうの身請の云込み(喜八)たと〜又六さんが島原で二と下らぬ男達でも(芝)三
人(金)の先達身請の一将(門)其の金お差支のねへおらが屋敷の名家老様つよづくや男づく
で息せいを張ふとも今よも爰へ旦那がムれバノウ婦さんたち(糸)アノ山三さんのおいらん
よ深いおじみと云ふ譯ていムんせぬが(照)仲の町の出雲屋でお逢いなさんした縁とな
り(花)おり〜忍びてムン〜たが(清)お座敷斗りてついで一度おいらんとうちとけて(喜)
様子の知らぬと此頃でいアノたまさんをあげづめお(花)今宵ハ遠山さんを身請してお屋敷
へおつれ成んすと親方さんが奥でのおはあし(門)うんならいよ〜名古屋様が今夜身請を
被成るとか〇さすがハ大名は名家老様だけ名古屋様のきつものだせへ(雲)遠山太夫を身請
する名古屋〜と名を呼ば(間)尾張から登つた客か但〜金物問やの亭主と思つたら(芝)喜
喜(都)さい番の大名で(門)六角家の名家老様だい(雲)たと〜六角でも八角でもこつちハ元
へ手つけをうつたはづだ(芝)ア、モシ其手つけの事は稻妻組の又六様がかう〜だど咄〜
さら太夫さんが云としやるよいついふ一度茨木屋で上つた事もない又六さんとやらよ身請
をされる譯ハなし〇ろこで手つけの親方さんから又六さんへきつをりお断をやたのサ(間)
ろんあらあじまのねへ親分のへるれて手つけをどらねへのだナア(雲)なぜまたろんなら
座敷斗りて床へ一度も廻らぬへ名古屋とやらよ(間)身請の相談(兩人)仕うけたのだ(芝)何
の名古屋様の方だといつて手つけをおもらいヤハせぬ(喜)たけりて身請を仕たいと云ふなら

遠山さんの身の代を(嘉)耳を揃へて(門)金づくならからが旦那がまげとどつていゝものか(雲)ろれおつけても親分の(闇)アノ又六(兩人)何をして居るのだナア(花)ろふして主は名古屋さんの伊家来てムんするへ(門)何おれかおらア山三様の家来ていぬへ六角家の大部やで頭など知られたる猪の熊門平といふ渡り仲間山三様の事をかれこれぬかそやつが有とさ(闇)聞のかしよ成るものか(照)モン門平さんアノ山三さま(女皆)まだ爰へムんせぬ子へ(門)ろんから此てうちん爰へおづけて長家を一ツペンひやかして来よふ(雲)まつちも頭の来るのを爰で待たいだ(闇)座敷で一ふく酒と仕やう(嘉喜)エ、お前さんお二人(闇)今日(くつ)と手をひろげてト紙入を芝助もたせるろれ見やれ(芝)どふやらお金の重ただわへナイ仲間衆おつれや(喜嘉)中居)お客様だよう(雲)エ、現金なやつだナアト是をさき唄お成り皆々のれん口へ這入る右の鳴物よて此道具ムん廻せ本舞臺一面の平舞臺日霞より欄間をおろし上手折廻して一間のぬり四間樟子家体正面うつく(花)のれん下手樟子家体この柱らみ茨木屋と印したる掛ケあんどん都て茨木屋下座敷の庭右の鳴物よて道具納るト踊り地お成り向ふより新造のまがき振袖成り駒下駄よて早咲のかきつばたさげ此跡より若衆のかかき兩人四會かをかたけ出て来り花道よてまがき茨木屋ともふり内さてありんす(ハ)マアお出被成んした客人さへ(○)まだ初かいのお方でムり升ふ(口)名として(兩人)お供をして参り升た(まがき)私しと一所ムサアム

んせいおアト舞臺へ来りまがき内へ這入りかかき門口へ四會を仰し皆さん客人が来升たよトこれよていせんのお花お照の兩人(兩人)お客様さんじやアと云しやんぞ(まがき)いらんの部屋の花活へさうと思ふて泉水のかきつばたをコレ見なまし(照)はんおおかおで(兩人)お客様が(かき)○爰へ名として(口)兩人おつれ升た(まがき)シテお客様ん(花)照)どなたじやアエ、(○)一寸見掛た所が田舎の大盡と見得てりつばな(兩人)お客様でムり升る(花)シテ見れば初ういのお客旦那さんをお呼び升ふ 皆々旦那さんくれ客さまでムんすさいナアト是よて茨木屋の鬼藏羽織着ながしお出て来り(鬼藏)チ、聞た(お照)を爰へ横づけと云はせと知れたお大盡様ト此時芝七喜六嘉八出て来り(芝喜嘉)サア(案内)升ふ○お客様んどこへ(花照)お客様ん爰おじやアぞへ(鬼)お大盡様よ(皆々)先まづこれへ(金右衛門)チ、ろれへ出て皆お逢ふ(皆々)サア(是へ)いらつ(やれ)升エ(金)チ、参らふ(と)云ながら四會の内方石部金右衛門田舎大盡の拵らへ大小よて桃色の手拭をかじり出できよろ(見廻)皆(こ)な(有)て聞しよりの賑(い)○あるじ(どれ)じやア亭主(鬼)あるじの鬼藏の私してムり升るサア(座敷)へお手をとり升ふ(金)ア、コレ(なれ)い物のいよふ身(遠國)の武士だが國元で朋友のやよ(都島)原の茨木屋とやを尋ねて女郎を買(一生)の咄しの種だ(お)へられる(こ)で参つた石部金右衛門とやもの以後をお見知り被下れい(さ)うして入用の何程おれ(い)ナア(鬼)お酒よ

かな太夫の玉代合せて拾兩一分でムリ升る(金)十兩一分どりぎやうさんな物入じやア實ハ
 香す喰す遠山さへよんでくれ、ハ事たりる何んと揚代金だけでまうなふてくれるならこ
 つちの懐のようくじやアア(鬼)ハテ何で有ふとよか(芝嘉喜)奥の座敷では相談お
 致し升ふ(鬼)ヲ、太夫が爰へ見得るまでト爰へいせんの糸遊出て来り○マア名代お糸遊を
 (皆く)ほんふ是のよふムリ升ふ(鬼)それ糸遊お客様をおつれせ(糸遊)申あなれば太夫
 さんのさなまをまで用が有なら私よ云ふて下さんせ(金)ヲ、く中く是も蓄の花で名が
 糸もふかコリヤアどふやら春めいてや(鬼)その上意を附込てお大尽様をうかしたて皆く
 めれんよ致す始りくト是よりさつてうふ成り皆く手拍子をうち(鬼芝嘉喜)一よ色道大
 尽を(照)二よ二とあい全盛を(糸三よ盛どりかまじし花)四ツよかくめうと中(金)五ツい
 つわるうろ云ふな(糸照花)六ツむつまし床内(糸)七ツ何んでもうちあけて(芝嘉喜)八ツ
 やりばり山吹の(鬼)九ツくどふもは祝義を(金)ハテ欲の深いやつだ(○)十でどつくり思案
 して少々午の割花く(糸)ハテマア奥へ(糸花照)ムんせいナアト鳴物入吉原雀の唄よなり
 のれんの内へは入るを知らせおこの道具ぶん廻す
 本舞臺元の道具お納るトいせんの雲八間助兩人を嘉八喜六の兩人よてなだめながら出て
 来り(嘉喜)マアく、侈りやうけんと成升せ(闇)おれたちが座敷へなせ女共をよこさぬへ
 (雲)侈りやうけんで済もれかトこの時奥より芝助出て来り(芝)マアく、きげんを直し座敷

をかへ呑直してお見なさい升な(闇)ろふお主が詫るなら呑直しも仕よふが(雲)遠山太夫が
 (兩人)身請の老よちとト此時奥より鬼藏よて(鬼)ハテお前さんの云分はわりゆたが何を云
 よも又六さんよ逢ぬ内(皆)あいさつ成りませんよトこの時向ふ揚幕おて(又)六ヲ、其
 わいさつが成ぬおれバをれが自身お聞おもかよトこの内いせんのお照お花お清お竹は四
 人出てト揚幕の内よて(門)ア、コレしてへぞ(又六)やかましいやいうしやアがれト又
 六好みの男達の持ちへよていせんの猪熊門平の襟がミを引とらへ出て来り花道よて(又六)
 花の曲輪を横たてよ男を達る稻妻もきのふは東今日は西遠山風の戀風かふどしたはづみで
 身請は建入どれ掛合にうしろふかへいろいで来掛る道中で邪广をひろいだありすけめどふ
 やアわれの見たよふナア(門)ろふもふわれもどこやらで(雲闇)こなりの頭の又六どん(雲)
 ヤアこいつのさつきの紺うんむん(女形)ほんよお前へ名古屋の家来(門)いうよもおり
 ア名古屋の家来一かも猪の熊門平だア(又)ヲ、よくぬかした老れおちつと云ふんが(門)面
 白ひおげ隠れハ、ねのへだ云ふんが有成らぬかせ(又)こふて云ふりトとらへよふとする
 をくいり(門)と云ふておげるのだアト橋掛りへ這入る(又)それおがすな(雲闇)合點だ(鬼)
 ア、モン高があんな部中間りやうけんしておやんなさい升(又)云ぶんの有アノ折助○一か
 一遠山太夫の身請の一件おれが爰へ来るから云ふん有めへなア(芝)サア此間から遠山
 さんの身請したいとおつしやり升が私の方よも去る大名の名家老様で然も身の代三百兩と

さめて今もそのお客様が來れを右から左り何も金づくもへあなたの方にお氣の毒ながら(又)だまりやアがれその大名の家老よく名古屋とか云ふ武士が身請を仕やうと云ふ遠山だけ女をこつちへ引上ケよやアどふも男が達ねへどき張るれ也へ鬼藏どのお掛合て百兩で太夫を引取約息一た先の相手が大名也へ三百兩お直をあげておれか方を破談おするのり(芝鬼)イエくまつたくろふてい(又)ろふておければ百兩でこつちへもづる(芝)それでいみすく二百兩の(又)相場違いも合點で一たんやくとく一た身請こつちへもづるか(喜芝)サアそれい(又)サア(三人)サアくく(又)返じのぬへい不承知る(闇雲)モチ是からい(又)綾の縞妻で(芝花)エ、(又)甲ダーやりてもやつて見せる(闇)モヤとくーんだ百兩で太夫のお前よあげ升ふ(又)ろんならいよく(鬼)きつとお前よ遠山のおげ升がッ百兩の身の代り(又)いよくこなたが得心なら暮合造より女房のおまつが金持つて來る老さ(鬼芝喜嘉)ろんなら身請の金をば(女四人)お内儀さんが〇テモア粹奇(鬼芝)ろんならいよく暮方造(又)きつと百兩手渡一仕様ト是を唄よなり鬼藏芝介お花お照中居鬼藏お附添のれんの内へ這入る(雲)これ兄貴こなたも元の大津の里で繪を書て親の手だすけこちどら様が者よろくよ物も云いぬへ者か何と思つて去年から(闇)ほらたちの仲間へ這入て達衆の附合力の強いやつとふの腕まへをぐれた兄貴也へ親分どろんきやうそれいをいら二人りが大きなやら(又)どふも縁やら遠山へぞつこんはれたが今てい又ろの色懸

をとりおいておいつをおれが手よ入れねば男の達ぬ譯がある(闇雲)シテろの譯い(又)種はこれだいたふくさよつみしぞうりを出と雲八とつて見く(雲)コリヤアなんだ片々のどふり(闇)それがどふした(又)ヲ、合點のちぬハ尤今雲八が云通り此又六は堅氣のさまじめヲト聞とつた事があるをどしの大晦日祇園の社へさんけいの大名からの代參で同勢大さ供廻りの中どの知らず道をきつたをろふせきものと手取足どり説ても中々聞入れず主人のときかいのこのどふりでぶちすへられ一ト夜明けの元日の吉相祝ふ年の夜よみけんへぎつをうけたれば出世の望みももふ叶いぬの時の主人と云ふ名古屋山三といふ事箱こふちんの紋所三本笠の印をバ灯ろげあさり見思へたをふりどりの奴めい今出さつたアノ中間(闇)ろんなら今の奴めを(雲)ひつらまいて(又)ア、コレたかが下人の渡り人おれがうらみは主人の山三を此どふりて(雲)ろれを達衆の中間へは入りぞめてあるくの聞へた(闇)色氣を別れく遠山を(兩人)請出ろふといやるの(又)サアアノ遠山が眞まど云ふ阿野へ四郎次郎元信とてかの山三めが主人筋先へ廻つて遠山をこつちへ身請しておくは山三をおれがつり出すをとり跡いあらましこんなもの(闇)ろれを様子かさらりと知れた(雲)シテ又身請のろの金(又)ろれい女房かさいかくして是非爰迄持と泰るいづしかりまつても居られまへいなやを一すろこよまで出うけて聞てこようかへまさかの時の心どともお(雲)ハアいふまでもなハ一様お染た模様雲いと(闇)一寸先の闇助がろろい成り込む

(兩人)稻妻組みろんなら兄貴(又)後逢ふト仕組宜敷道具ふん廻す
本舞臺いせんの道具も成るトさわき唄通りかくるも成り爰いせんの鬼藏若者甚助立掛り
居て

十

(芝)さつき稻妻組の又六どのが太夫を身請の一件しきりよかれよまかせて置けとおつーや
るがいつたいどういう譯でムリ升エ(鬼)サア身請の金の又六も出来様譯のねへとまた
けるこて百兩こーらへて来たトお前も太夫を渡さうといひたがとーのかねと見込みのあ
るアリまがきを二代の遠山と名をかへさせたのト芝助よさゝやき(芝)ろんなら百兩出来た
時のやくろくの遠山の此女だともがさなふりむけるとおつしやるがろふしく誠の遠山さ
んは(鬼)山三さまも三百兩を渡さんともふ思ひ付いどんものだ(芝)モシ又六が不承知の
ろの時の(鬼)百兩どらぬぶんの事(芝)一寸私しが出雲屋まで(鬼)大義ながら(芝)どれいつ
て参り升ふト芝助と奥へ這入る鬼藏見へ有て(鬼)しうー山三様もお出の時お奥の大尽よあ
いさつもせねを成らずやんよ金をもふけるのいさつがしいものだナアト奥へ這入る跡鳴物
お成り向ふ揚幕よりいせんの喜六箱てうちんをもち跡より新造まがき名古屋山三好みの着
付大小酔たるこあしいせんのお花小性駒吉本名銀杏好みの持らへ中居のお清家來小文次好
みの着付一本ざー跡よりいせんの嘉八箱てうちんを持ち出て來り花道まで(山三)北がうよ
經人有りせつせいよーてひとり立つと彼の傾國の粧ひを知らて過ーが在番のろのつれく

をなぐさたよ(まが)一座の衆も殿揃ひで出雲やよ結びいんのとー近み(駒吉)ろの色廊の
夕げしきまみへろめしとおとなしの遠山と呼ぶ遊び女の(喜嘉)ろの太夫さんおバ今宵の身
請(小文治)ろこが武邊と色里の諸譯よかしてい且那樣(山)妓樓へ登る時刻ふくつきやう皆
のもの(女形)マアムんせいナアト皆々舞臺へ來り宜敷すまふ(山)コレ駒吉日頃様子をみた
いと申た茨木屋賑いしもので有ふ(駒)又お館どの格別な〇始めて見請升てムリ升る(小
文)始めてお覽被成てと何事もめづらしくたまつたものでムリ升ぬ(まが)主がムんした
ろのこををいらんや親方さんへ(花清喜嘉)一寸お知らせ升ふ(鬼)お出の様子承知
くど鬼藏出て來り(鬼)是のく山三様さきはどから太夫さんもおまちなね彼是あしお
座敷へ(山)コリヤ山三だの名古屋のと誰が聞まひものでもない〇さて此間た談じて置た遠
山を(鬼)ハイ三百兩さへ被下升れをすぢふもさしあげ升ふ(山)その金子も持たせ参つたさ
それを太夫遠山の(駒)館へ直つれゆく女子(山)同道して人目あたつ跡より籠て送つ
てくりやれ(鬼)ヘイウしこまつてムリ升る旦那があつれ被成升たこのおまかしようつくし
いものでムリ升るナアシテ又このお若衆さま(山)チト子細有て某がチ、それく義およ
つて兄弟の因を結びし弟の駒吉(鬼)ヘエ左様でムリ升るうおしつけなから三百兩頂戴と出
かけ升ふか(まが)遠山さんもおまちなねもへ(鬼)サア此案内を致し升ふ(山)コレ駒吉日頃
顔がとたいといふ遠山は逢ふたらそちが太夫へ頼みの筋をナア合點がいたか(駒)よふ心得

十一

てあり升る(まが)アノお若衆さんぐあいらんへ(女三人)頼みの筋と(山)山三が弟の駒吉
 あれバちかきさま成さんためコリヤ一ッ内ろのはさみ箱を鬼藏よ渡せ(小文)畏つてムリ升
 る左様成らバ旦那様(山)太夫の部屋へ駒吉来やれト駒吉の手をとりどりやア遠山よ逢ふか
 へト是を唄ふ成り皆々奥へ這入る是よく道具ぶん廻す

本舞臺平舞臺上下障子家臺くし方の欄間あるし都て遠山部屋の体よく道具止るト直唄上る
 りよ成り下手より四郎次郎好みのほぐ染着ながしよて出て来り

(唄)こがる、身よは色かへぬ松の葉越しの一トふしもト合方成り(四郎次郎)アノ三味せ
 んの太夫の根じめ面白うふよ唄ふよへ遠ざかりしうのうちにふいよ〜心が替りしものぞ
 (唄)操の名さへ空だのめ(遠山)としよ逢ふと云ひさんすいたれさんじやアぞへ(四郎)ヤ遠
 山ト此時上手の障子屋臺を引あげろ遠山好みの拵らへよく住ふ(遠)四郎次郎さんか(四
 郎)エ、おのれハナア(遠)四郎次郎さんよふマア来く下さんしたナア(四郎)ナニよふマア
 来くくれたよふろの様な事がいへたナア起証せいしを反古よしくいよ〜心が替つたのか
 (遠)ろりやア何を云ひしやんす其恨みならこつちからたどへせかれたお前へでも忍んでな
 りと来く来れたらうこのとふなど仕様ものおまへころはとうよくトやアはいナア(四郎)エ
 、稜すな何もかも知つて居るぞよ(遠)ろりやア何を(四郎)身請の咄一を(遠)エ、(四
 郎)様子とまかきお皆聞た山三とやら云ふ武士客よ請出さる、のて有ふがナア(遠)ろりや

アそれゆへお服た立といろりやアお前無理じやぞへ金で賣た此からだを又金たいてゆれて
 もく客よと仕様がふんせぬとへなア(四郎)どう云へバこういふともうおのれより詞の替
 さぬろの客よ直よ逢ふで埒を明て見せうとい(山三)遠山の身請の客ろれへ参つては意得申
 さん(四郎)何んとト山三出て参りやろの方は(山)阿野四郎元信殿よも見とすれいふるまへ
 名古屋山三元春でゐる(四郎)ろの山三元春が何んで廓へ参りぞ(山)何んでとい元春どの
 恨めーきほ一チ言元春がほ咄し申す一ト通りは聞被下今改めて申迄もいねと其もどさま
 のは父君阿野へ金毒祐慶殿のは家と拙者が主人六角家のは先祖とい兄弟は一家中過し應永
 の亂れより久〜くろゑんよ過きたる所ろ然るお身はこの遠山おは心うばられ今も館へは
 入りなく云なづけけたる銀杏前何なた様を戀したひ見るお忍びす遠山を身請な〜くかけを
 隠さるは本必よ立替り聳入あらんと詮方つきたるまが斗らひは賢慮あられよ元信どの(四
 郎)かばと迄お人々か心といため被下やと面目もなき四郎次郎かゝるふかくの身を持つて
 六角の家相談が何んとして成るべきぞ四郎次郎元信の世よ奇き者と銀杏どのよあきらめて
 下さる様立歸りてつたへて来りやれ(駒)ろふじヤアト自害せうとせるとめて(山)エハはた
 んりようナア(遠)マアお待被成升ふ(四郎)心得ぬこの少年の死んとするの(山)ろれぞすな
 るち銀杏前(四郎)ヤ、何んと扱はるなたが銀杏の前よナア親と親とがやくろくの詞を守り
 (駒)ろりやア私しが必根を不便と思ふて此末とも(四郎)ヤ、(駒)お嬉しふぞんじ升る(遠)

十四
ろのお詞で私しもあんどサア是からい私しが部やで内祝言のさかつき(山)姫の姿お色直一
三々九度の引附の(遠)初會をは縁の方々歳(山)目出度奥へお二人りさま(駒四郎)うれもど
ふやら(山)ろのはるんりやうよいト皆々顔見合すを木の頭よて幕

金瓶梅會我賜貨

- 一 船越 筈四郎
- 一 鳶者 史郎吉
- 一 浪人 九郎五郎
- 一 仕出シ 若者
- 一 茶や 女

本舞臺三間の間た石の玉垣上手よ石の鳥居下手よ出茶屋をしつらへせんじ茶のぼんどふを
かけ都て鎌倉天神社鳥居前体宜敷大ひやうしひて幕明くト

相中の叅けい人拾せりふ有つてみなく上手下手へ這入るト向ふ揚幕より船館管四郎好
みの着附羽織とかま大小跡より鷲の者史郎吉好みの拵らへよて出て舞臺へ來りこの時上手よ
り浪人者九郎五郎好みの拵らへよて出て來り(九郎)おれきれきからは合力をねかい升(史
郎)エ、出ぬへくトつきのける(九郎)ひどい事をさつーやんなこもかぶりとい違ふ浪人
だいト管四郎と顔見合せ(九郎)管四郎さん(史郎)ろんならあなたハアノ人を(管)イヤく
知らぬく身共の左様な浪人者よちかづきのもたぬ(史)成程旦那この様を浪人もの、何
あんどもあれとれさんけいをして叅り升ふ左様なら旦那もるーを被成升せト史郎吉の鳥
居の内へ這入る(九)管四郎さん久しくお目よ掛り升ぬ(管)九郎五郎か誠久く逢なんだ
扱く見るかげもないおちぶれよふ(九)私ーのれいらく若いときからなれつこゆえへち
まとも思ひ升ぬ(管)ろふもふ姿になつた子細をいやれナ(九)サアお聞なすつておくん
せへまーも元の上生れせりもうの百性で居た所ら姉嬢の矢瀬文吾兵衛と又弟の武具藏と
兄弟同士の家とーあらうい姉嬢の文吾兵衛の方かまけと成つと失瀬の里をい拂われ大坂
へ出て旅かせぎふと一た事でお前様とお近付と成り欲ふまよつて相場よ掛りとふー身
上を棒よふり女房の死ぬ豊人りの怪の縁を切て人よくれ夫から奥州の方へ立退た所ろふと

一た所から秀衡どの館へとり入り侍分よまてとりたてられやれ嬉しやと思ふ所へ九郎判
官義經どのが秀ひらの方よ居る其内秀衡どのと死ふーやつと伊達錦戸の弟兄弟よも大るん
だいの持されずるの内よ鎌倉どのからうつ手が向つて辨慶でさへ衣川で立往生うちどら
いらかーいていれを堀のうめ草よ成らぬ先よと有る雜物をかひさらつと城を逃だー秀衡
一家はたちまちめつほうよく命ひろいを致し升たよ(管)然し名たる秀衡の館た定めし
名刀物の貝もあつたてあろふ(九)サアろりやよろひよ目の掛ケず賣口のい手道具るいを
持ちたして賣くいよして居升たが種が附ては讀の通りの此始末然一たつた一トツ残つた代
ろ物とを買てと下さるまいろの代物はこれどまり升る(管)成程コリヤその昔陸奥あて始
めて掘出す黄金あて造たる梅壺の此香箱秀衡の家よ於ては金瓶梅となづけ家のけいづよつ
よきし寶鎌倉よ於ても此品は草を分ての珍尋ね高館落城のろの時よやのふの内よくちと
てしとませまりー此香合よく其方もつておいたナア(九)鎌倉のせんざが嚴敷いつそつぶし
ふと思つても金の位がよとぎるからこいつもあぶないものといわを賣のもちぐされ(管)此
品物の拙者があつくり鎌倉どのへ差上てすつしりはふびをもらつてやるよ(九)イヤモシ間
違ひありまをまいが成ふ事なら右から左りよ(管)ろれも尤も然し只今あては金子もないわ
したれ晚拙者が屋敷へ忍んで叅れ(九)きつとお頼み申升(管)承知致一たかならずともよ待
て居るぞよト通りかぐらよなり九郎五郎の鳥居の内へ這入る(管)世もまれなる金瓶梅の

此の香合どふぞ大金よ志たいものだナアトこの時上手の内よて人聲するもへ下手へ這入る上手よりいせんの史郎吉出て來り跡より九郎五郎出て(九)モシ親方(史)おぬいさつきの浪人だナアおらよ用があるどい(九)イエサ齋藏どの、は子息の史郎吉どの(史)おれが親父の名を呼ぶこなたは(九)何もろんなよおとろく事いねへお前の親父齋藏どのが大坂の日本橋通りよ小さいきき住居をして居たじぶん二三度ひいんお行つた事もあるさつき爰へきた侍ひと西川やのあらいさらひ啓十郎どの、身の上まで(史)ろんならさつきの咄とおべいぶりおせるのだナア(九)何云掛りをゆふものかなお前が旦那の啓十郎と云ふのかれが爲よい實の悴だ(史)どほふもねへめつたな事い云ぬもの人聞もあるものだ(九)はじを云いねバ、からねへ啓十郎が四ツのとき齋藏どの、お二品と波錢の八百もらい齋藏どのへくれてやりそれよ引かへ實親いこの通りおれいらくしてしようがねへどふか折入て頼まへ身のふりけ附丈ヶをどふ予工めんをして下さへ(史)ろんな事をおれが知るものろ啓十郎さんいこなたの實の子よもせよおれの親父が養子よしてろの齋藏い死んで仕舞バ地をくへいつて掛合がい、(九)ろふいヤアかたがねへ啓十郎の居所もさつきの咄して思うつたからい是からいつてどま、く(史)コレろのなりでもかかれてたまるものか、かたがねへ是からいつて始終を咄、一生らくは隠居さまよしておげるい(九)をふてくれ、をこつちい上首尾然、をふ成つたろのときよいこんな身なりで(史)着物ぐれへいおれがやりく

りやすい(九)をふてくれ、をこつちい猶い、ヤア(史)そつちがよけれをこつちも丁度尋ねた梅壺の(九)エ何がどふ、たト(兩人)聞合のこな、を木の頭史ナアニうめへ咄、も有だろふよ是をさ、みよろ、く拍子幕

花笠嵯峨猫魔稿

一	直嶋松浦の助	一	舞子水木實の粧姫
一	八ッ代玄番	一	仲居の口 錦木
一	五嶋大藏	一	同 ○ 東路
一	大嶋源八	一	同 △ 關谷
一	玉嶋新十郎	一	同 × 伏屋
一	下部與五平		
一	同 どん助		
一	敷井玄達		
一	近習三八		
一	下部一人		
一	大村主膳		

本舞臺正面上へ寄ぐ九尺中足の四釘立の亭座敷此向ふ張物祇園社の境内紅葉盛りの遠見所々々紅葉の立樹是へ七草をませてうざり能き所み床几二三脚を置もふせんを掛け都て都祇園社境内模様よて幕明ト向ふ揚幕より八ッ代立番好みの着付とかま大小藪井立達醫者の拵らへこの跡より相中の下部いつもの拵らへよて出て來り花道よて景色のよき捨せりふ有つて皆々舞臺へ來り床几み腰を掛け

(立達)何の用か今日愚老をお招き有し(立番)イヤ餘の義みならず兼て頼み置たる彼の一藥殊よ寄らむ近々よ入用なれを(げん)其義ならむお氣遣ひ被成升な何時よくもお問よ合せ升ふ(下部)イヤモヲ悪い事あり抜目のないあつばれは名醫(げん)然しお問よ合すその替りねがい置しははふびを(立)首尾能參らむはふびは望みよ任すわへ(げん)うれよくぐろふ眞事あわんしん時お立番さま今日是へ松浦の助さまを始新町の舞子水木を始め多くの仲居を召寄せらるゝ此所存(立)兼てそちが知つての通り某がし心を掛けて居水木松浦の介めよ横心んさられ無念也へ深き所存よて今日當社へ呼寄せ松浦の介が相手となせど實は身どもが斗ひてくとき落さん(げん)うれは兎も角爰は往來(立)いかさま松浦の介が入來も問も有るまい(下部)さんじの間だ別當方あて(げん)何かのみつだん(立)サア來やれと三人上手へ這入る詠らへの唄の鳴物よなり向ふ揚幕より直島松浦の介好みの拵らへ近習の侍い好みの拵らへ跡より水木好みの着附なり跡より仲居三人やりて一人跡より近習二人付添ひ出て

(松浦)春成りぬ秋の木の葉も錦きして花よぞ増る詠めありとい誰が口づさみのことこの葉かへテ面白の風情じヤアア(近習)いかおも君のあふせの通り錦の綾の紅葉をよ照りそふ詠めり又格別(水木)うの色どりもあてがれて君れ情けをあふせどり(仲居○)今日ハ殊更志つなりと(仲居○)花と花との菊合せを(仲居△)うの盛り枝ぶりを手折ふといふねじけもの(仲居甲)アノ憎ていな八ッ代さま(やりて)粹とやぼとの敵味方(近習○)戀より乗らぬぶこつもの酒と聞てはかくれぬ拙者(近習○)めつたよ身ともよまけいせぬ(近習△)何の志かれどお君よ(仲居皆々)水木さんも一所お(水)うんなら殿さん(松)みなも來やれト皆々舞臺へ來り床几み腰を掛るみなく酒さかなを出し酒ゑん模様す事宜敷此時向ふ揚幕よて大村主膳(主膳)うれお盛まむらく(松浦)何とトむたくよなり大村主膳少いふけたる拵らへ上下大小よて出て來り花道へ平伏せる(松浦)うちハ主膳何也へ酒ゑんを(主膳)お止め申ハ憚りながら君の大事と存るもへ(松浦)又しても其意見聞耳持ぬとつとろこを下りおろふ(主膳)イヤ此場いいつかな立升まい(松浦)よつくき一チ言其の場の立さぬト一ト腰へ手をかける(皆々く)マアくは了簡遊こ一升せ(主)其は怒りの合點で申上度事有つて(松浦)云事あらむとくく申せ(主)然らば兎を蒙りてト舞臺へ來り(松浦)きりく申せ(主)申上るハ身身の行跡(松)何と(主)あなた様のナア我君よ直島家の血筋其大切なるハ身を持つて新町の遊里よお通ひ又ハケ様よ日毎の酒ゑん次第よつものるハ行跡(松)たまれ

主膳予が放埒のろの元ハ大内家の紐ひ姫と云号けなるハ菊地が逆意あて姫の行方知れせ此世ハ於て望みのない身遊女狂ひも無理でハ有ま(主)君ハ後室嗟嘆の方へ義理を思ひての事ならんが舍弟左近様ハハ分家相續君ハ當家ハ相續ハ先君よりのハ也いげん君ハハ大切なるハ身分何卒拙者が意見ハもちい下され(松)主膳が意見で酒もさめ何かおもろい仕様のハいか(仲居○)ろの思ひ付ハこの一座ハハ別當のお座敷で(仲居○)思ひ(松)の藝盡(松)それがよい(水木)一所ハサア來やれト皆々附添ハ上手へ這入る跡ハ主膳近習一人残りて(玉島)主膳様(主)玉島氏ハかなる天魔が見入りハハ是非もなき義で(玉)君ハ後室の義理を思召跡目のおのぞみなくろれをさけん其爲ハこの程方の不行跡(主)ろれハ附ケ入るハッ代立番(玉)それ故ハ拙者も君のお側ハ附添かれ(主)ぬかりなき其元かれと猶も心を附かれ(玉)それハ附ケても舞子の水木君のおたねをやとせ(主)様子(主)トハ云者の身元イヤキアノ舞子(玉)武將の館へ身受もならず(主)うれとい(玉)これとい(主)心ろ掛りな(兩人)事ともじヤアト思案の思入この時向ふ揚幕より足がる與五平いつもの拵らへ出て出て來り(與五)ろれハハ出て被成升るハ主膳様新十郎様でハムリ升ぬか(主)ろちハ足輕與五平ならずや(玉)やれハ久しぶりよてあい申た(主)見ればいせんハ變るろちハ形り何家業を致し居るナア(與五)申上るも面目なけれどお家ハ奉公致せしをりつちかお事の間違から武士の意地捨かたく相手をうつて捨たるを慈悲深

ハ帶刀さまお助けられ大原の在所ハ託住居やうハ(主)ろの日を送る百性朝夕お託を申てお入り升るハ帶刀様おハ堅勝でムリ升かあ(主)ろの帶刀との不慮の事よて(與五)帶刀様おハどう被成升たナア(主)當時お家の佞人トびこり帶刀ありてハ邪正と思ひざんト間の爲ハ切腹なしてはかあささい(玉)ろの上妻子も追放ハ家内の者ハ皆ちり(與五)始めて聞しお家の凶事私しめが今日當所へ參りしは過去升た親々が年回ハ當りし也(其追善と高野へはるハ參つて見れハ都の方がなけハ廻り廻つて今爰であなたハハこのお目みへ神佛のお引合でムリ升ふそれハ附てお入り入ッ御兩所へお願ハハムリ升(主)何れハ(玉)願ハハ(與五)サアろのお願ハハ申升る何卒御兩所さまのお情けよて二々度お家ハ師參の成る様おとりなし被成てハ下さり升いう(主)ろの義なれハ頼みがなふても承知致しハ罷り有る(玉)一ツの功だよ立なれハ刀よかけて取なしやさん(與五)難有ふらんじ升る(主)ヲ、ろちハ歸參の手つる某思ふ子細もゆれハ(玉)爰ハ往來別當よて(與五)左様ならハハ兩所さま(主)ろちもいつ所ハサア斯ラ參れト唄ハ成り三人上手へ這入る向ふ揚幕より大島源八好みの拵らへ跡より五島大藏同ハ拵らへよて出て來り(大藏)ろれハムると大島氏でハムらぬか(源八)イヤ是ハ五島氏ハハ所でお目ハ掛り升た何は兎もあれかしこへ參つてお咄し致ろふト兩人舞臺來り床几ハ掛る(源八)兼ハ立番どのハ斗いあて家の跡目ハ赤くて叶わぬ二々品の寶取り入る手段ハムらぬか(大藏)ろの義も立番とれとヤ合せ彼の百

蝶の一卷は隼太郎より付盗み取らせる工風上使入來のろのかりは實紛失と申立れば嘉門主膳を始として松浦介も人知れずかたを生るろの手段の玄番どの、皆胸中(源八)何くら何まで抜目なき行届さうれお付てもアノ新十郎どふか退りた付る工風と云るまいか(大藏)ろの事はかよふてゐるトさしやき(源八)スリヤアこれ書狀をト懷中より書狀を出し(大藏)心きいたるやつをかたらい(源八)どふうよい者があればよいがナアトこの時いせんの近習出て來り(下部)モシ大藏さま玄番さまがさいせんよりお待兼でムリ升る(大藏)左様でムつたか幸ひうなたお頼み度いこの一通浮國元より参りしと申て大勢の居り合たるはなかへ持参致してはくれまいか(下部)お氣遣ひ被成升ふ(大藏)然と頼んだぞ左様ムらむ源八どの(源八)サア参るてムころムト兩人上手へ這入る(下部)何だり譯がわからぬわへ然しこいちも浮用をたせむ香代も成る事だもへトこの時いせんの與五平立聞して下部の持し書狀をとるを見て(下部)ヤそれはお屋敷も追放された與五平大事な書狀こつちへかへせ(與五)たしうお貰つたこの書狀何でわれも(下部)ろふいマアこふしてト兩人立廻りの見へ宜敷道具ぶん廻す

本舞臺立間の間だ中足の二重正面銀襖上手も床の間是へ女郎花の花をさし上手壹間の障子家体いつもの所は枝折戸秋草の盛り都て祇園社別當所客殿の摸樣合方まで道具止るト是といせんの水木煙艸盆を扣へ居る

(水木)日毎よさ、のおわい手にまむしつかれを休めんどこの放れ家も來て思ひ廻せばこの身の索性元より松浦さまどの云號なれと朝てきむはんの汚名もより晴て逢れぬ妹脊中古主のよーみど東嘉門舞子の水木と名をうへて明暮お側よかしづくも多くの人は氣を兼るよ有まわられぬ玄番目が我身へたいしてむたいの戀トハ何とまたものじヤアナアト是へ玄番出て(玄)ろこよ居るのと水木でない(水)はんお前は玄番さんどれ私しと一寸(玄)水木待ちやれハテマアおまちやれ(水)ろふーく何ぞ用でムんそへ(玄)何ろ用とはつれないぞへ日毎も送るわが文もいろよい返んじもあいどふよく心たどへいやはとさらわふども抱て寝ねばなぬわい(水)たどへお前がどの様よ云いおやんすども殿様のおなさけ請へこの水木は前の心よまたがふ事といやでムんす(玄)ム、其片いちも松浦の助へ(水)義理を立るも女子の操(玄)スリヤどの様も申しても(水)くさいさいナアト水木は奥へ這入る爰へいせんの玄達出て來り(げん)ハッ代さま(玄)玄達老う(げん)只今のていたらくきつい仕置もお逢被成升たナア(玄)ろんなら爰の様はおむ(げん)あらまじわれよて見聞仕升た(玄)面目のなき只今のまだらうれお付ては玄達老さいせんお頼申置た彼の毒藥よて松浦の助をおつころして仕舞へむよるべなきさの捨小松うるときころい此玄番もまたがふり知れてある何分頼む玄達どのト聞て玄達懷中より藥を包みし紙を出し(げん)是を酒よ入れて香まそるときはたちまちもつて命はじやくめつ(玄)スリヤこの藥を酒お醸して用ゆるときは松浦の助を始め

として忠義のやつぱら片としうら往生安樂左門の助を家督となり家の政事は心の儘水木か
 ぱ手活の花是ど中も貴老の働さ(げん)働さついでよアノ水木手まぢうよあなたのとゆふよ
 (玄)シテろの手みぢうにと云はるゝ(げん)さいわい當所お居るころ幸い人なき間だよ伺
 ひ寄まつさらつて人なき所へ忍むせ置心の儘おかく説わらと往生づくめよ女の是非あくあ
 なたのじゆふお成るのいつぢやう(玄)ろれい妙けいシテろの許がとたらきよて(げん)あな
 たのは家來どる助と申合せ首尾よくやつてお目よかけ升(玄)かならせどもよぬからぬよふ
 (げん)心得升たト玄達ハ奥へ這入る(玄)是てよふく落付たトこの時奥よて仲居みなく
 よて(仲居)サアく爰へかいで被成升いナアトいせん仲居四人松浦の助大藏源八新十郎
 出て來り宜敷住ふ(玄)是はく我君よは是へは渡り被成升たか(松)ろちの玄番まち兼居つ
 た(大)是はく玄番さまさいせんより我君様のお待兼(源)サアく今一こん我君さまお
 呑直ハ如何でムり升るナア(松)ろれがよいくど是よて仲居みなくよて酒さかなをな
 らべるみなく酒を呑事宜敷この時下手よりいせんの大村主膳出て來り(主)我君を始め玄
 番どの何つれも方おも是よお出被成升たか拙者も酒のお相手仕るふ(玄)是はく大村氏
 おもは酒のお相手被成るとい君おもさぞかハ萬息でムり升ふト又みさくおて酒を呑ひ
 事宜敷有てこの時下手より下部どる助手紙を持ち出て來り(どろ)は國元より参つたる至急
 のは狀と玄番とつて(玄)何をも方お覽被成お國元よりの此は書狀(大藏)何よくよ、玉島

新十郎を押込を申付るとある狀の文言(新)何某うーをかい込めとい(主)玄番どのの書面
 拙者も拜見(玄)ろれは覽被成(主)この度玉ーま新十郎事申付る子細有てコリヤア半分切て
 ムるが押込め申付とい何所よ記してムり升るナア(大藏)ヤアどろろれいさいせん飛さやく
 より請取て戻りがけ追放され一與五平めがろれを渡せとあらふとづみツイ引ささ升てム
 り升る(主)引ささてムるの書面証こならぬ無用の書付是ハ拙者がお預り申升る(玄)ど
 ふども貴殿の勝手よ召れ(松)又主膳めがたたくる一い座敷をかへてのみ直一じヤア(仲居)
 (どろ)ろんちらみなさんハ一所お(松)サア参ふトみなく奥へ這入るを知らせよ(主)
 いかいたはけのよい樂しみを致したといト是を鳴物よてこの道具元の境内へ戻るトをた
 くよ成り上手より玄達水木の手をとりむりよつれて出て來り(水)コリヤ私を何となさ
 んす(げん)ハテ入ッ代さまへ連ておくのじヤア(水)エ、となして(げん)エ、いけいぶとい
 きりさぞ爰をわもばつーやれトこの時上手より主膳出て來り水木をかこい(主)ろの方ハ
 井玄達何者よ頼まれたサアじんせうよ白狀いたせ(げん)コリヤたまのぬト玄達ハ迹て這入
 る(主)ハテ遊足の早いやつ(水)わやうい所へよふマア來て下さん一た有難ふムんすといナ
 ア(主)何のおれいお及び升ふ○まづく大内家のは息女粧姫さま(水)どふしてららむが
 (主)お隠しあるなさいせんあなたのとどつ語り残らず聞て儘よ承知コリヤアららむが素
 性お(主)いりよも(水)聞たとおれを隠すよ及びを云号の殿はと知りつゝ今日まで隠すも

父の汚名又二ツよの今の身の上推りやうしてたもいのう(主)ろれよ附ても忍ばせ申すお隠
 家よ困つたものじやアアトこの時いせんの與五平出て來り(與)主膳さま是よお出て被成
 升たか(主)よい所へ參つたらちお折入て頼みがある(與)何私いめよお頼どい(主)外でもな
 いはおお出て被成るゝの粧姫さま(與)スリヤあきたが粧ひ姫様でムり升るか(主)頼どいふ
 の外ならお姫おバ大原の在所へお供なしかかき申てくれろれを功お家へ歸參の拙者
 が尋らいゆるしてくれん(與)スリヤおゆるし被成て下さり升るトナア有難ふる存じ升る姫
 ひかならず御うくまひ申升れとお案度被成て下さり升せ(主)ろれ承わつて安度致した片時
 も早う(水)うんならろの内(主)まつい無事て(水)よい吉左右を待て居るぞや(主)如才な
 けれど路じお心を(與)心得升たト與五平水木の兩人揚幕へ這入るトこの時上手より松浦の
 助十郎仲居四人付添出て來り(松)さいせんより水木が見得ぬがどこへ參つた(仲居)は
 んおどこへ(みな)水木さん(新)ろの水木どのの主膳どのが所存有て只今爰よ
 (松)何故よ水木おバ(主)ろの水木どのは大内家の(松)コリヤ皆が聞くゆへ(主)アイヤうの
 義は氣遣ひ遊すア仲居の姿よ出立しは(新)お家の恩懐むるものども(仲居)私は松
 井七郎が姉の錦木(同○)新十郎が妹東路(同△)倉橋娘關谷(同▽)逸之進が妻の伏屋みな
 く(お見知り置れ下さり升ふ(松)扱ごとくよりろの方たちは(新)皆主膳殿が付置けいと
 (松)主膳かんらん致した(主)恐れ入たるろのお詞水木さまころはお云号の粧姫さま(松)知

らぬ事とて不志義の奇縁(主)只何事もわれくが存意もムれバ(新)は案度被下(となく)
 わが君さま(松)過分くこの時奥より下部一人伺ひ出て(下部)松浦の助くわんねんとさ
 つて掛るを主膳とらへて(主)こやつも正しく(新)逆意の片われ(松)切つて仕まへ(主)ハッ
 ト一寸立廻り主膳下部を見事よ切る(松)見事ト主膳を扇あてあをく主膳刀をうしろへ隠そ
 みなく宜敷見得カケリよて宜敷拍子まく

明治廿二年七月十日印刷

同年七月廿日出版

版權與行權所有

定價金五錢

相續者

瀨川 さと

著作者故瀨川如皋後家

版權登錄

日本橋區濱町二丁目十一番地
石渡鐵治郎方同居

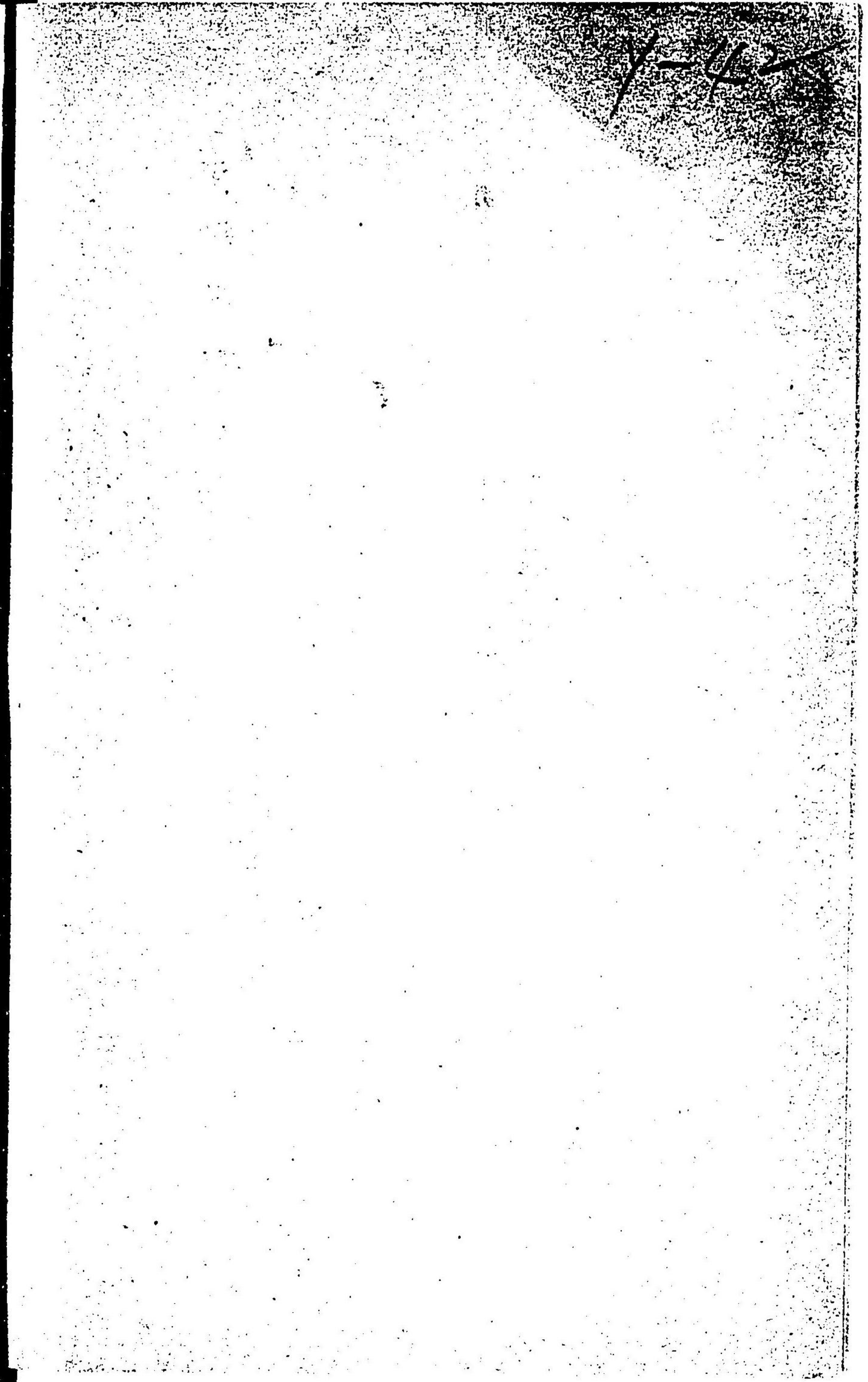
印刷者兼

東京日本橋區濱町二丁目拾七番地
保坂芳兵衛

賣捌所

東京日本橋區蠣殼町三丁目十三番地
大石新造

廿二年七月十日蠣殼町勝島印刷



088746-000-4

特52-603

不破名護屋遠山鹿子・金瓶梅曾我賜貨・花塋嗟峨猫魔稿

瀬川 如臯/著

M22

DBJ-0405

